

# ホテルニューグリーン

竹中尚文

私がホテルニューグリーンに滞在したのは、1983年10月4日から11月11日までだった。この間、断続して宿泊した。

ホテルニューグリーンは、パキスタンのペシャワールという町にあった。この町は現在のカイバル・パクトゥンクワ州の州都である。この州名変更は21世紀初頭のことだった。それまでは北西辺境州という名で、この州の大半は部族地域と呼ばれ、パキスタン政府の力が及ばずにそれぞれの族長が実効支配をしていた。当時、バスで北西辺境州から州境を越すときには、警官によって停車させられて荷物検査があった。北西辺境州では、物品に間接税がかけられず免税状態であった。北西辺境州で購入した品物には、こうして州境で税を課した。

ペシャワールの名を耳にされた方も多いと思う。この町の西にあるハイバル峠を越せば、アフガニスタンである。最近まで、アフガニスタンに関する報道の発信地はペシャワールだった。1979年からアフガニスタンは内戦状態になり、戦乱の首都に報道関係者が常駐するのは困難だったからである。最近ではアフガニスタ

ンの首都カーブル発の報道が多くなった。

ペシャワールからハイバル峠までは30~40 kmで、ここから西はアフガニスタンである。峠を越えて西に80 km程進むとジェララバードという町があって、さらに西に150 km程行くとカーブルがある。カーブルの町はヒンドークシュ山脈の山中にある。カーブルから北に山脈を抜けると、シルクロードに出られる。ヒンドークシュ山脈というのは、アフガニスタンの北東から南西にかけて連なる山脈で、「インド人殺し」という意味の山脈名である。この山脈の北東の付け根はパミール高原であり、この高原から南東にカラコルム山脈・ヒマラヤ山脈と続く。

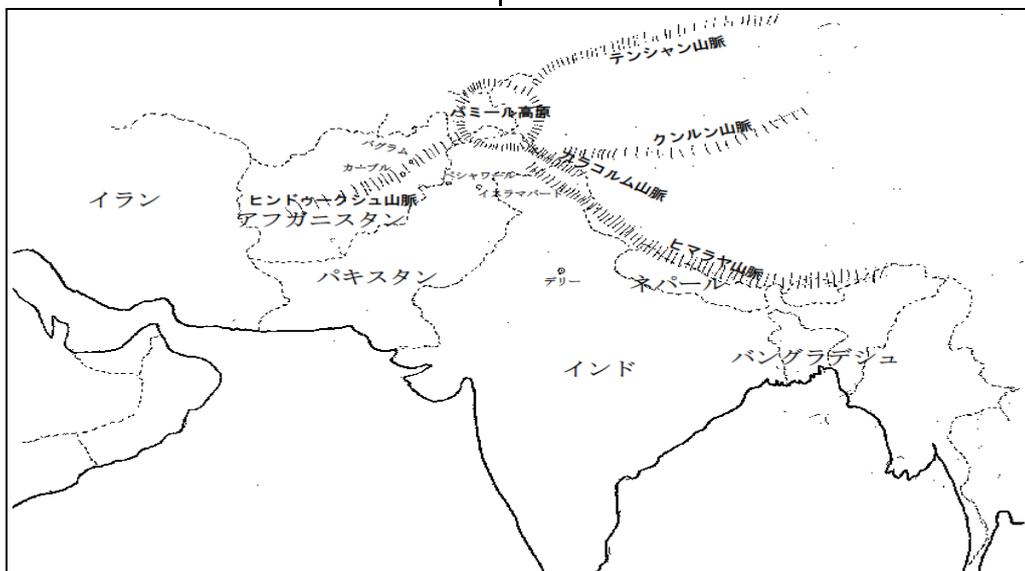
インド亜大陸という平原は、北からパミール高原が両腕を広げたような山脈で閉じられた世界なのである。インド人が外の世界に出ようとするなら、陸路では北西のヒンドークシュ山脈を越えるしかなかった。海上交通は、古代ギリシア時代にアラビアとインドを結んだ記録もあるが、一般的ではなかった。西のアラビア海を渡って中東と結ぶ航路、東のベンガル湾を渡って東南アジアとも結

ぶ航路は大航海時代以後のことになる。

紀元前 4 世紀末にアレキサンドロスが東方遠征をおこなった。彼の軍は、ヒンドゥークシュ山脈を越えて、インダス川あたりで引き返した。アレキサンドロスが去って、紀元 1 世紀頃から紀元後 3 世紀ごろまでこの地を支配したのがクシャーン王朝であった。カニシカ王が有名であるが、シルクロードからインド北部をその支配下においた。この国の都が現在のペシャワールであった。夏の都にしたのが現在のカーブルの北にあるバグラムで、冬の都にしたのはインド北部にあるマトラーであった。この時代に、仏教においては大乘仏教が興り、ガンダーラ美術という彫刻や建築に見られる仏教文化が栄えた。大乘仏教の興隆と仏像彫刻の起源は、仏教の歴史において革命的な出来事であった。多くの仏教学者が大乘仏教の興隆を思想的展開で追い、ガンダーラ文化という具現的な展開を異なる研究としている。同じ時代に同じ場所での研究対象であるのだから、

一体となった研究がなされるべきだと思っている。

カーブルの北にあるバグラムは 20 世紀半ばよりフランスが発掘調査をしてきたところであるが、1979 年のソ連によるアフガニスタン侵攻で調査は中断された。バグラムはクシャーン朝の夏の宮殿のあったところで、カニシカ王に関連する発掘品もある。バグラムを北に抜けるとアムダリアの上流を渡って、シルクロードの要衝サマルカンドに至る。またバグラムから西に行くとバーミヤンを経てペルシャに至る。古代より重要なここにソ連は空軍基地を中心とした巨大な軍事基地を築いた。1989 年にソ連が撤退すると、アフガニスタンの民族・部族の勢力争いになる。2001 年の同時多発テロによるアメリカのアフガニスタン侵攻が始まった。バグラムはアメリカ軍の基地となった。2021 年 7 月にアメリカ軍機が人を振り落としながら離陸して、この地はタリバーンの支配下となった。



私がこのホテルニューグリーンに泊まることにしたのは、その前に泊まっていたタキシラの宿舎の従業員が勧めてくれたからである。「ペシャワールに行ったら、私の兄がホテルニューグリーンに勤めているから訪ねてみる」といわれた。

タキシラというのはパキスタンの首都イスラマバードの西にある都市遺跡である。20世紀初頭にイギリス人の考古学者ジョン・マーシャルによって発掘された。発掘報告書は20世紀中頃に出版されるが、ガンダーラ文明の考古学的研究の教科書のようなものである。この地は紀元前4、5世紀から約1000年間の活動期だったという。最盛期は紀元1世紀から3世紀ごろまでというから、まさしくクシャーン朝の時代である。タキシラにあるシルカップは都市遺跡で、上下水道を備えた町であった。マーシャルはここで「双頭の鷲」のレリーフを報告している。彼は鷲というが、私には鳥としか見えない。この「双頭の鷲」が東ローマ帝国に伝わったというのを否定する材料はない。そして、それをアリア人の文化の象徴と考える人たちがいるようである。二つの頭を持つ鳥については、『仏説阿彌陀経』の「共命之鳥」（ぐみようしちょう：共命の鳥なり）が二つの頭を持つ鳥であると経典の注釈書は述べている。『仏説阿彌陀経』は、おそらくこの地で書かれたものであろう。

タキシラの話を始めると止まらないので、これくらいにしたい。私が1983年にパキスタンを訪れたのは、その前年に大学の掲示板に海外で研究をしたい大学院生に研究費を提供すると書かれていた。博士後期課程だった私は、パキスタンの仏教遺跡についてのフィールドワークをしたいと書いて提出した。しばらくすると、掲示板に私の名前が貼られた。そんなわけで、パキスタンのフィールドワークはタキシラから始めた。

タキシラには、小さな博物館があった。その前に客室が2部屋だけの宿舎があった。パキスタンの政府観光局の駐在管理官と従業員2人で、およそ黒字は見込めないように思うが、他に泊まる場所もないのでありがたい施設であった。管理官はパンジャービで従業員はパシュトゥと民族が異なった。彼らはできるだけ言葉を交わさないようにしているように見えた

パキスタンでは、パンジャービとパシュトゥとシンディが主な三民族である。最も人口が多いのは、パンジャービでパキスタンの東部からインドにかけて暮らす人たちである。シンディはカラチを中心としたパキスタン南部に暮らす人たちである。パシュトゥは北西辺境州からアフガニスタンにかけて暮らす人たちである。アフガニスタンの主要民族でもある。

タキシラから馬車で幹線道路にで

て、しばらく待つとペシャワール行きのバスが停まった。ペシャワールまで5時間ほどは、乾燥した平原を埃だらけになって走る。ペシャワールの町に入ってくると、道路脇で焼くシシカバブの煙が埃に混ざる。夕暮れのお祈りの時間になると、モスクから礼拝をうながすアザーンが流れる。映画の一場面に身を置くような気分だ。

夕刻の時間であるから、滞在するホテルを早く決めたいと思いながら、ホテルニューグリーンに向かう。町外れのバス溜まりに路線バスが到着した。バスターミナルというしゃれたものではなく広場にバスが到着して、また出発していく。出発するバスは助手が行き先を連呼する。それに応じて客が集まってくる。思惑の人数に達するとバスは出発するのである。バス溜まりからホテルまでは三輪タクシーである。

勧められたホテルニューグリーンは新しい建物で、清潔感があった。客室は、空調のある部屋と扇風機の部屋の二種類で値段がかなり違う。乾燥地帯の秋だから、迷わず扇風機の部屋に決めた。新しく町に着いて、最初に訪ねたホテルで決まることは珍しい。

私は南アジアを旅するとき、ホテルを予約したことがない。その町に着いたら、その地の人にお勧めのホテルを尋ねる。そのホテルに行くと、自分の目で部屋を見て値段を聞いて、

納得がいけばそこに泊まることにした。ある町では、バス溜まりのすぐ向かいのホテルに入った。値段を聞いて部屋を見たら、4畳半ほどの広さの土間だった。他のホテルを捜してみると、受付の男は「おまえはまた戻ってくる」といった。他をさがしたら、その町にはホテルが1軒しかなかった。簡易ハンモックのようなものを借りてそこに泊まった。

ホテルニューグリーンは、4、5階建ての真新しい建物で大通りに面していた。入ると受付と小さなロビーがあって、ロビーの向こうは中庭が吹き抜けになっていた。中庭の右側にエアコン付きの部屋が並び、左側はエアコンなしの部屋があった。中庭の向こう側の1階はレストランになっている。日が暮れると、入り口には大きな鉄の扉が閉じるようになっている。このホテルは安心できそうな気がした。

私は北西辺境州で銃声を聞かない夜はなかった。ここの住民は銃を持つ。パシュトゥは銃を持たない男は存在しないという。この地では、女性は家の中で暮らし、必要な用事のみブルカを被って外出する。男が集まれば、銃を取り出して自慢し合う。そうした彼らの会話に私は馴染めなかった。彼らにいわせれば、私は銃に関して全く無知であるという。

あるとき、私の持っているウォークマンが話題になった。私は順番に

ヘッドホンをかけて曲を流した。その中の一人が

「それ、売ってくれないか？」

「いやだよ。僕がいつも使っていたいから」

「おまえは銃を持ってないから、カラシニコフ3丁と交換しないか？」彼にしてみれば、ずいぶんと好条件の提案をしてくれたらしい。銃は私を癒やしてくれない。

パシュトゥの男たちが銃を持つのは最近のことではない。イギリスのインド統治はこの辺りが境界だったらしい。北西辺境州には、あちこちにイギリス軍の砦の跡が残っている。ペシャワールから西にはイギリス軍は入れなかった。パシュトゥの大部分はアフガニスタンにいる。銃を持って山岳地帯で暮らす者たちにイギリス軍は手を出せなかったようである。彼らはとてつもなく目がいい。そして、銃の扱いがきわめて巧みである。かつて、大英帝国はその植民地から勇猛な部族をイギリス兵と採用した。ネパールの一部族であるグルカ兵は、フォークランド紛争の時にも活躍した。パシュトゥを支配下に置くことはできなかった。

ハイバル峠には銃を作る有名な村がある。世界中の銃を手作りで複製するらしい。何百年も前から複製銃を作っているという。彼らにとって銃は日用品であるようだ。

ホテルニューグリーンに到着して翌朝、私は久しぶりにゆっくりした朝を迎えた。部屋の前のベランダから中庭を眺めていたら、一階下のベランダでカメラの調整をする人がいた。一階下まで降りて行って、近づいて

「日本人？」

「えっ！そうだよ、日本人だよ」

彼は、アフガニスタンの戦争の取材に来たカメラマンだった。

彼は私と同世代ということもあり、すぐに仲良くなった。それからもうすぐ40年になるが、今も大切な友人である。

ノリさんはフリーのカメラマンでフリーのライターと共に大手テレビ局のニュースと雑誌の取材で来ていた。これから、ムジャヘディンと共にアフガニスタンで取材をする予定だという。

アフガニスタンでは1979年12月24日に突如、ソ連軍が全土に侵攻をした。世界中がクリスマス休暇で気を許している時だった。不意打ちだった。この頃、アフガニスタンでフィールドワークを狙っていた私は、こうした状況の変化をチェックしていた。ソ連軍に対して、アフガニスタンの人は銃を手には反抗を始めた。常より銃を手にして、チョットした問題解決も銃で計ろうとする民族性もあるので、多くの人たちが戦うことにしたようだった。

私は 1980 年 3 月にもペシャワールを訪れた。ソ連侵攻の 3 ヶ月後のことだった。この時、私は修士課程の学生だったが、私はこのままでは現場を知らないまま研究をするかも知れない。現場を知らない研究者になりたくないと思った。そんな焦る気持ちで、ペシャワールを訪れた。

それから 3 年で、アフガニスタンからの難民が増えた。北西辺境州のあちこちに難民キャンプができていた。多くの人たちはアフガニスタンから逃げ出したのだった。いくら銃を持って男の誇りなどといっている、家族との安全な暮らしを優先した人が多かった。私の同じ歳の男が「自分は家族そろって安全な所で暮らしたい」といった。彼がペシャワールで家族の暮らせる場所を確保しておいて、その間に父親が家族全員をカーブルから連れて来る手はずになっているという。私が彼に出会った時は、彼の家族がアフガニスタンから逃れてくるのを待っている時だった。彼の家族を案ずる目には、涙が浮かんでいた。

ノリさんたちは、ムジャヘディンの事務所を訪ねては、アフガニスタンに潜入する手はずを依頼しているようだった。ムジャヘディンというのはイスラム自由戦士ということらしいのだが、アフガニスタンでソ連軍に挑むゲリラのことをいう。すでにアフガニスタン周辺の人たちは、イスラム原理主義のような暮らしを

しているようにみえる。ほとんどの人たちは自分たちの暮らしが標準だと思っているが、他のイスラム教と比べてみれば原理主義のような暮らしである。

ホテルニューグリーンに滞在中、私はノリさんたちと一緒に食事をするようになった。隣のテーブルで食事をしている人たちは北欧のテレビ取材チームだった。あと数日でアフガニスタン潜入らしい。入国ではない。戦争中の国に入っていくのだが、入国手続きをして入国するのではない。ゲリラと一緒に密かに潜入するのである。このホテルにはそんな報道関係者がたくさん泊まっていた。一人のアメリカ人カメラマンもいた。海兵隊を辞めてから、戦場のフリーカメラマンになったそうだ。この頃、日本やアメリカではテレビ局や新聞社の社員を戦場の取材に出さなくなったそうだ。ベトナム戦争の時は正社員を派遣した。その経験で有名になった記者やカメラマンがずいぶんといた。私はその人たちの本を読んだものだった。

私はホテルニューグリーンにずっと泊まっているのではない。ここから北西辺境州内のいくつかの地域でガンダーラ遺跡に関する調査をするのである。ペシャワールの北東に広がる平野にある遺跡は、クシャーン朝最盛期のものが多い。そこから北へマラカンド峠を越えると、スワート渓谷である。ペシャワールより少

し標高が高いので、日本の本州のような気温ですごしやすい。この地域はイタリアが発掘調査をしたところである。仏教の歴史を研究する上で、大変に興味深い遺跡が多い。現場に立って、どんな空気のところで思想が形成されたのか考えてみたい。また、遺跡はそうした思想展開の表現であるように思う。スワート渓谷はとても興味深い土地である。

ところで、このスワート地域で2012年にマララ・ユスフザイさんが銃撃された。

私がスワートからペシャワールに帰ってきたら、ノリさんたちが従軍する部隊が決まったという。パンチシールに向かう補給部隊と行動をとるにしている。この頃、ソ連軍に対抗するゲリラは主なもので3グループあった。マスードを中心にしたグループ、ヘクマティアルを中心にしたグループ、ドスダム将軍を中心にした軍閥だった。マスードはタジク人、ヘクマティアルはパシュトゥン人、ドスダムはウズベク人である。彼らが何人であるかが、あれから今日までのアフガニスタンの歴史展開の大きな要素となった。

ノリさんたちのアフガニスタン潜入の日が近づくにつれて、緊張が高まる。ノリさんと一緒に行くレポーターがこんな話をしてくれた。

「俺、この前、アフガニスタンの北の国境の所、アムダリア(川)あたりで、取材したんだ。アフガニスタン

からソ連に兵士を乗せたトラックが橋を渡ってくる。兵士たちは、笑い合い、ほんとうに嬉しそうだった。そのあと、逆にアフガニスタンに入っていくトラックに乗せられた兵士は緊張感いっぱいの張り詰めた顔をしていた」

ソ連兵は戦車のハッチを開いて顔を出したりしないという。顔を出すと、そこを狙撃されるからだそうだ。戦車が破壊されたり、ヘリコプターが撃墜されたりすると大変だ。捕まった兵士はなぶり殺しにされるという。ゲリラとして戦うアフガニスタン人は、戦争で家族を亡くした者だという。

出発の前夜は、ノリさんは眠れただろうか。その朝、ペシャワール郊外で何台かのジープに荷物が満載されていた。ノリさんは荷物の後ろの隙間に足をいれて、進行方向と逆向きに坐った。振り落とされないように積み荷のロープをしっかりと握って、ジープは出発した。ノリさんは私の目を見つめていた。ジープが離れていくが、ノリさんはじっと見つめていた。私もずっと見つめていた。ジープが見えなくなってもノリさんの視線をさがした。ゲリラのオフィスに帰ろうと声をかけられるまで、私はその場に立ち尽くした。

ノリさんたちとアメリカ人カメラマンがアフガニスタンに行ってから、ホテルニューグリーンに活気がなくなった。郊外の高級ホテルから通っ

てきていたイギリス人ジャーナリストも取材ネタのおこぼれを拾えなくなったので来なくなった。報道関係者が少なくなると、話をしに来る人もほとんどいない。そんな中、老人が訪ねてきて私に話を聞いてくれという。私は報道関係者じゃないよといったが、かまわず話し始めた。彼は、この戦争はいつまでも続かないという。ソ連の補給が保たないという。そもそもソ連はソ連南部でイスラム教徒が増えて、数十年でソ連はイスラム教徒の国になるという。この戦争を続けていると、ソ連南部のイスラム教徒が補給路に戦いを仕掛けるだろうという。その後の歴史は彼のいうようにはならなかったが、ソ連が自国に異なる宗教を入れさせないためその外側を侵略するという話には驚いた。

私はノリさんたちの安全を尋ねるためにペシャワールの町の中にあるゲリラのオフィスを何度か訪ねた。そのグループはマスードを中心とするグループだった。そこで私はマスードの弟に紹介された。風貌はよく似ているが、自分は兄のように戦闘に出ることはできない。自分は、文学が好きで詩作などをしていたいから、ここに居るのだという。

マスードはソ連が侵略を始めたとき、学生だったが故郷のパンチシールに戻り、数人の仲間とソ連軍に戦いを挑んだ。彼のグループは勝利を重ねた。パンチシールは戦場になる

ことはなかった。マスードはここに学校と病院を作った。そして、ソ連兵の捕虜収容施設も作った。ノリさんたちの一つの目的は、この捕虜の取材であった。パンチシールのみに捕虜収容施設があった。マスードは1989年にソ連が撤退するときに、すべての捕虜を解放した。私の想像であるが、マスードのこうした行為は一般的なアフガニスタン国民には受け入れがたかったのかも知れない。1989年にソ連が撤退して、アフガニスタンはいろんな勢力が名乗りをあげた。ちょうど映画『アラビアのロレンス』を見るかのようになった。その中でアルカイダが台頭する。アルカイダの登場はタジク人のマスードがアフガニスタンの中心になることを嫌ったパキスタンがパシュトゥ人の政府を作ろうとする狙いがあったといわれる。しかし、アルカイダはビンラディンに牛耳られてしまう。そして、マスードは2001年9月9日にビンラディンの送った暗殺者によって爆死する。マスードの死を確認したビンラディンは、9月11日に同時多発テロを実行した。

今は昔、もうすぐ40年になろうとする。